

説一切有部の断惑論

——他界遍行随眠の断じられ方について——

藤 本 庸 裕

1. 問題の所在

説一切有部（以下、有部）の代表的な煩惱説である九十八随眠は、見所断の随眠と修所断の随眠に大別され、さらに見所断の四部（見苦所断ないし見道所断）の随眠は、「遍行」(sarvatraga)と「非遍行」(asarvatraga)、または「無漏縁」(anāsravāmbana)と「有漏縁」(sāsravāmbana)という区分によって、それぞれ二分される。筆者は以前、所縁と断じられ方の2点について、この見所断の各随眠（但し欲界の他界遍行随眠を除く）の基本的な関係を次の如く推定した¹⁾（見集所断と見道所断の随眠は、それぞれ見苦所断と見滅所断の随眠の場合に準じる）。

〈随眠〉	〈所縁〉	〈断じられ方〉
・見苦所断の遍行随眠	苦諦（有漏法）	所縁を智慧で見ること
・見苦所断の非遍行随眠	見苦所断の遍行随眠	所縁が断じられること
・見滅所断の無漏縁の随眠	滅諦（択滅無為）	所縁を智慧で見ること
・見滅所断の有漏縁の随眠	見滅所断の無漏縁の随眠	所縁が断じられること

これらの随眠の中、見苦・見集所断の非遍行随眠が「所縁が断じられることで断じられる」という点は、現存する有部の論書では整理・統合を経て明確には説かれていなかったが、そのことを導き出す根拠となったものの1つが、見苦・見集所断の非遍行随眠は「俱縁が断じられることで断じられる」と規定する、『婆沙論』の論師たちの見解である²⁾。この「俱縁」とは「所縁」と「能縁」の2つを指している。問題は、この非遍行随眠の断じられ方は理論的には「所縁が断じられる」という条件1つで十分であるにも拘わらず、何故に『婆沙論』の論師たちの説では「能縁が断じられる」という条件が加えられているのかという点である。また、「能縁が断じられることで断じられる」ということの意味も問題となる。通常、能縁とは所縁という条件によって起こる結果であるが、この断じられ方では、結果である能縁が断じられることによって条件である所縁も断じられることにな

る。これは通常の因果関係を逆転したものとなり、一見すると奇異に思われる。本稿では、以上2つの問題を解明するに当たり、最初に「能縁が断じられることで断じられる」とのみ規定される他界遍行随眠を取り上げ、この断じられ方を検討する。それは、この他界遍行随眠の断じられ方は以後の有部の論書に採用されており、従って後代の論師たちの見解を参考にし得ることによる。

2. 「能縁」の指すもの

遍行随眠には自界遍行随眠と他界遍行随眠の2つがあり、後者は「能縁が断じられることで断じられる」とされる³⁾。しかし、この「能縁」、即ち「他界遍行随眠を所縁とするもの」が何を指すのか、『婆沙論』では明示されない。有部の教説において、他界遍行随眠を所縁とする随眠は2つある。1つは同じ部に属する遍行随眠を所縁とする見苦・見集所断の非遍行随眠であり、もう1つは見苦・見集所断の自界遍行随眠である。欲界の自界遍行随眠は欲界の苦諦と集諦、即ち欲界の全ての有漏法を所縁とする。また、随眠それ自体は有漏法であり、苦諦や集諦に含まれる。従って、欲界の自界遍行随眠は欲界の他界遍行随眠を所縁とすると言える。以上の2つの随眠のうち、もし上記の「能縁」が非遍行随眠であるならば、非遍行随眠は所縁が断じられることで断じられる随眠であるから、他界遍行随眠が断じられるには、他界遍行随眠それ自体が先に断じられなければならないという過失に陥る。故に、この「能縁」は自界遍行随眠を指すと見てよい⁴⁾。

3. 「能縁が断じられることで断じられる」ということ

では、この「能縁が断じられることで断じられる」とは、どのような意味であるのか。これについては「能縁」が自界遍行随眠という特定の随眠を指していたことに注意したい。有部の完成された因果論によれば、五部の各随眠の間には遍行因と同類因という原因、等流果という結果の関係（異時的因果関係）が設定されている⁵⁾。見苦・見集所断の遍行随眠は遍行因として、あらゆる染汚法の原因、従ってあらゆる煩惱の原因となる。また、見苦・見集所断の随眠はそれぞれ同類因として同じ部の随眠の原因となる。こうした随眠間の因果関係を踏まえれば、「能縁が断じられることで断じられる」という条件において、能縁とは実質的に遍行因または同類因としての自界遍行随眠を指し、所縁である他界遍行随眠はその結果であって、原因（=能縁の随眠、即ち自界遍行随眠）の断滅に基づく結果（=所縁の随眠、即ち他界遍行随眠）の断滅が意図されていると考えられる⁶⁾。

4. 「能縁」という語が用いられた理由

それでは、断じられるべき随眠を表すのに何故に「原因」ではなく、敢えて「能縁」という語を使っているのか。この理由は次のように考えられよう。まず、『婆沙論』の論師たちの説が現れる一連の文脈は、以下の『発智論』の議論に対する注釈となっている。

『発智論』 T26, 926a22ff. : 【問】 諸の随眠は何から断じられるのか。【答】 答える。〔諸の随眠は〕 所縁から（因所縁, *ālambanāt）〔断じられる（引き離される）の〕である、と⁷⁾。【問】 汝は「諸の随眠は所縁〔を智慧で見ること〕から断じられる」と説くのか⁸⁾。【答】 答える。その通りである、と。……。

ここでは「所縁から」という語句の解釈を巡って、随眠一般の断じられ方から特定の随眠の断じられ方に論点を変えつつ議論が展開する⁹⁾。『婆沙論』の論師たちは、見所断の随眠の他の2つの断じられ方と同じく、この「所縁から」の語を注釈する形で、つまり「所縁」に関わる語句を用いて他界遍行随眠の断じられ方を規定する必要があった。そこで利用したのが、自界遍行随眠が他界遍行随眠にとって原因でありかつ能縁であるという関係である。こうして彼の論師たちは、原因である自界遍行随眠を指すのに「能縁」の語を用いたと考えられる¹⁰⁾。

5. 見苦・見集所断の非遍行随眠の断じられ方

最後に、冒頭で問題にした見苦・見集所断の非遍行随眠に戻ろう。この随眠は「俱縁」、つまり「所縁」と「能縁」が断じられることで断じられるとされていた。この「能縁」も同じく見苦・見集所断の自界遍行随眠を指し¹¹⁾、有部の因果論では、この自界遍行随眠は非遍行随眠の原因（遍行因または同類因）となる。故に、この非遍行随眠に適用される「能縁が断じられる」という断惑の条件も、原因（自界遍行随眠）の断滅による結果（非遍行随眠）の断滅を意味している。

では、どうして非遍行随眠にこのような断じられ方が適用されているのか。まず、自界遍行随眠、他界遍行随眠、非遍行随眠の3つの随眠は、同一の瞬間においてこの順序で原理的に断じられるとされており、非遍行随眠は他界遍行随眠と極めて近い位置にある。また非遍行随眠は、他界遍行随眠と同じく最初に断じられる自界遍行随眠を原因としかつ能縁とする点で、「能縁が断じられることで断じられる」という断じられ方を適用し得る。こうした状況を考慮に入れると、先行して断じられる他界遍行随眠に「能縁が断じられることで断じられる」という断

じられ方が適用されていることを受けて、その同じ断じられ方を適用できる状況にある見苦・見集所断の非遍行随眠にも同じ断じられ方を適用してしまい、その結果、『婆沙論』の論師たちの説においては、本来の「所縁が断じられる」という条件に「能縁が断じられる」という条件が加わり、「俱縁（所縁と能縁）が断じられることで断じられる」という条件になったと推定される。

- 1) 拙論（藤本 2014, 藤本 2015, (33)–(35)）参照。 2) 世友（*Vasumitra）の説については『婆沙論』 T27, 114b6–12, 設摩達多（*Śarmadatta）の説については『婆沙論』 T27, 114b1–6（『阿毘曇毘婆沙論』 T28, 91a12–17）参照。 3) 欲界の他界遍行随眠は、色界や無色界を対象とするが、欲界の四諦を見る法智忍によって断じられる。つまり、随眠を断じる時の智慧の対象と随眠の対象が一致せず、故に「所縁を智慧で見ることで断じられる」という他の遍行随眠に適用される断惑の条件が適用できない。そこで、「能縁が断じられることで断じられる」という条件を会通として立てたと考えられる。この問題の生じた経緯について今は立ち入らない。 4) これは *AKBh* 319, 24–320, 1 に明記される。 5) 各随眠の原因については『婆沙論』 T27, 286b18ff. に詳述される。 6) 能縁の断を原因の断とする解釈は、『順正理論』 T29, 650a2–13, *TA* P 316a4–8 / *D* 175a3–6, *AKVy* 498, 28–29 により支持される。 7) 『婆沙論』 T27, 113b29–c5（『阿毘曇毘婆沙論』 T28, 90c13–16）参照。 8) 『婆沙論』 T27, 113c9–10 参照。 9) これは『発智論』に由来すると見られる *AKBh* 320, 16–20 の議論から推定される。 10) 「能縁」の原語は不明であるが、*AKBh* の玄奘訳の相当箇所（T29, 111a18）では「彼能縁」（*tadālambana*, それを所縁とするもの）と表される。 11) 非遍行随眠も自部の非遍行随眠を所縁とするが、もし断じられるべき「能縁」が非遍行随眠ならば、非遍行随眠が断じられるには非遍行随眠が先に断じられねばならないという過失に陥る。

〈一次文献と略号〉

AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. Patna: K. P. Jayaswal Reserch Institute, 1967. *AKVy*: *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*. Ed. Wogihara Unrai. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1971. *TA*: *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā nāma* (Sthiramati). P no. 5875 / D no. 4421.

〈二次文献〉

藤本庸裕 2014 「見所断の随眠における貪・瞋・慢・無明」『印仏研』 63 (1): (158)–(161).
藤本庸裕 2015 「見所断の随眠における貪・瞋・慢・無明の史的背景について」『東洋の思想と宗教』 32: (25)–(38).

〈キーワード〉 随眠, 断惑論, 他界遍行随眠, 能縁

(早稲田大学大学院)